

## 「通常学級」の学びから問い直そう

朝日新聞 4月7日「フォーラム」は、9面の紙面全体を使ってインクルーシブ教育を報じている。リードから一障害のある人も、障害のない人もともに学ぶ「インクルーシブ教育」という考え方が、学校で広まりつつあります。国際社会と歩調を合わせ、日本でも少しずつ進展してきました。教育を通じて共生社会を目指す具体的な取り組みから、課題を考えます。

だが、全児童生徒数が減少傾向にあるなかで、特別支援教育対象児童生徒は増加傾向にある。こうした傾向をどう見ればいいのか。元大阪市立大空小学校長の木村泰子さんが標題について次のように述べているので紹介したい。

私が大空小学校で目指したのは、目の前にいる一人の子を安心させることでした。きっかけは開校1年目に転校してきた6年生です。

発達障害があり、食事は白いごはんしか食べられませんでした。前の学校では熱心な給食指導を受け、入学から2週間で登校できなくなったそうです。この子が安心して周りの子と一緒に居られるにはどうしたらいいか。そこから出発しました。

映画を見た人の多くは、子ども同士が助け合う姿を見て「なんでできるの?」と聞きます。大人が子どもを分断し、力をそいでいることに気づいていないのです。子どもたちはいつも一緒に学んでいれば、言葉でコミュニケーションをとれない友達とも、表情、しぐさなどを通じてコミュニケーションをとれます。

特別支援学校や小中学校の特別支援学級に在籍する子が増えていますね。多くの人が、みんなと一緒に学ぶことの大切さを頭では分かっていますが、実際には「特別なケアが必要だから」と分けてしまうのです。

特別なケアが必要な場合に、それを求めるのは当然です。その支援が、みんなと一緒にできないことは一体どれくらいあるのでしょうか。人の多様性を認め、尊重しあうために、「分ける」「分けない」の議論の前に「通常学級」の学びを問い直すことが大切だと考えます。

障害のある子もない子も、ちょっと乱暴な子も、みんな一緒にの教室で学び、育っていく。映画「みんなの学校」は、そんな小学校に密着取材したドキュメンタリー。映画は関西テレビの番組をもとに制作され、15年に公開された。今も市民グループなどによる自主上映会が途切れなく続いていて、上映回数は1700回を超えたそうだ。私も名古屋で上映会の企画に参加して、何回も映画を見た。写真の木村泰子さんの著書からも、すべての子に居場所があり、すべての子の学習権を保障することを目指した「みんなの学校」について知ることができる。



(2019年4月10日)